

## 巻頭言

教員 末石忠史

### 目次

巻頭言	1
私の推薦図書 原 朋直 先生	2
私の推薦図書 加藤 翼 先生	3
新学長インタビュー	4
図書館からのお知らせ	10

皆さんは「絵本 地獄」(白仁成昭、中村真男著、宮次男監修 風濤社 (1980))という絵本を知っていますか? 1980年に出版された本で「命」について子供に考えるきっかけを与えてくれる作品です。私は小学生の時にこの本を学校の図書館で見つけ、そこに行くたびに気になって何度も読み返していました。絵本なので文章だけであれば小学生でも5分も経たないうちに読めてしまいます。しかし、一枚一枚の地獄絵が何とも心を揺さぶり、なかなか読み進めることができません。この本に描かれている絵は千葉県安房郡三芳村(現南房総市)延命寺に所蔵されている絵巻をもとにしています。絵自体は江戸時代の絵師によって描かれたもので、日頃私たちが慣れ親しんでいるかわいいイラストや鮮やかな色彩の挿絵とは違い、それだけでもただならぬ雰囲気を感じさせてくれます。

人生には絵本を読むチャンスが3度あるといいます。まず自分が「幼い時」、次に親となって「子どもを育てる時」、そして「人生の後半に差しかった時」です。はじめて読んだ時は気づけなかったことでも、語彙力も豊かになり、人生も積み重なっていくと読み返すたびに新しい発見をするようになります。

今、手元にある「絵本 地獄」は小さかった娘のために購入したものです。購入はしたのですがこの本を娘と一緒に読んだ記憶はありません。そっと本棚に置き、小学生の時の自分のように本人が気になって読んでくれるのを期待していました。今回、図書館の巻頭言を執筆するご依頼をいただき、そのことを思い出したので中学生になった娘に聞いてみました。どんな反応があるかとても楽しみにしていたのですが、本人は関心がなかったようで話はあまり弾みませんでした。ただ、それを横で聞いていた弟の方がドキドキした様子で「あの本、怖いよね」と話してくれました。我が家では弟の方がよく見ていたようです。

私の専門である学校教育では、あらゆる教育活動を通して子どもたちに「いのちのかけがえのなさ」を伝え、夢や希望をもって生きること、人への思いやり、互いに支え合って生きることの大切さを教えています。その際、読書も教育活動の一つとして行われ、図書館を利用しています。このように学校では目的をもって図書館を利用しているのですが、大学生の皆さんには時間のある時にふらっと図書館に立ち寄ってそこで時間を過ごしてみることをお勧めします。私にとって大切なことを教えてくれた「絵本 地獄」のように、偶然出会った本や音楽によって皆さんの心の奥底で眠っている「問い」が刺激され、「答え」に近づけるヒントがもらえるかもしれません。図書館はそんな自分の“未知”とも出会える場所ではないかと思います。

## 私の推薦CD

### 原 朋直 先生 (ジャズ/ジャズ&アメリカンミュージック“JAM” コース)

タイトル: Nu Deco Ensemble + Aaron Parks / Live from Miami

著者名: Nu Deco Ensemble & Aaron Parks

#### アルバム

(サブスクリプション配信のみ)

■Apple Music

<https://music.apple.com/jp/album/nu-deco-ensemble-aaron-parks-live-from-miami-ep/1577840845>

■Amazon Music

[https://music.amazon.co.jp/albums/B09B2TXJCT?ref=dm\\_sh\\_RYLv7zGptTLfM8kz1ZOES2R4h](https://music.amazon.co.jp/albums/B09B2TXJCT?ref=dm_sh_RYLv7zGptTLfM8kz1ZOES2R4h)

■Spotify

<https://spotify.link/3hCyWZfaPDb>

#### \*他

#### 収録曲

- 1.Siren
- 2.Chronos
- 3.Interlude
- 4.Nemesis

公式YouTubeでこの演奏を観る (聴く) ことができます

■Siren

<https://youtu.be/NfogDitYER0?si=9qpkdb0RkRk9Bg5i>

■Chronos / Interlude

<https://youtu.be/yNqCigtCpIY?si=ixVirf4EYgYP1G3n>

■Nemesis

<https://youtu.be/36t2NixsVSo?si=Y7suNEZwko6AGjH->

Nu Deco Ensembleはマイアミを拠点に、ジャズミュージシャンやR&Bミュージシャン、ダンサーやラッパー等の多彩な音楽家たちをゲストに迎え、その音楽を掘り下げ新しい音楽世界を再構築する様な活動をはじめ、本格的なクラシックへの取り組みも行うといったとても幅の広い制作をする音楽家集団です。

このアルバムは現代を代表するジャズピアニストで作曲家のアロン・パークスをゲストに、彼が過去に作曲しレコーディングした作品をこのプロジェクトのためにSam Hykenがアレンジ、それを演奏し収録したライブアルバムです。

アートにおいて、「何か」を作るとき、そこには制作した人の思いや人生が映し出されます。これは特にピュアな作品制作ということではあるのですが、何故かという、それを行う動機が「自分自身の頭の中のイメージ世界」から来るものだからです。ジャズの楽曲制作やインプロビゼーションについて、私はそれを「テーマ (モチーフ) の続きの歌を作っていく」ことであると考えています。なので、作曲やそれを基に発展させるインプロビゼーションにはそれを作った人のその時の内側の世界がダイレクトに表現されると思うのです。

アロン・パークスの描き出すジャズの世界観から私は果てしない広さと深さ、そして美意識を感じます。それは彼の音楽を受け止めた私の内側の世界が激しく感じ、そして生まれた「私だけの感動」なのだと思います。

お勧めなのは、

まずこのアルバムに取り上げられた各曲の最初のレコーディングを聴いてみて、更にこのアルバムでそれらがどの様に生まれ変わっていったのかを聴くという楽しみ方です。

是非!

#### 1.Siren が収録されているアルバム

「Aaron Parks Little Big / Aaron Parks」

#### 2.Chronos が収録されているアルバム

「James Farm / Joshua Redman, Aaron Parks, Matt Penman, Eric Harland」

#### 3.Interlude

\*これは即興なのでこのアルバムからのみの収録となります。

#### 4.Nemesisが収録されているアルバム

「Invisible Cinema / Aaron Parks」

## 私の推薦図書

加藤 翼 先生 (短期大学)

書名：センス・オブ・ワンダー

著者名：レイチェル・カーソン著

上遠恵子訳

出版社：新潮社

刊行年：1996年7月29日

ISBN：978-4-10-519702-5



保育者を目指す学生の皆さんに『センス・オブ・ワンダー』を紹介します。本著では「神秘さや不思議さに目を見はる感性」と訳されています。筆者は甥っ子のロジャーとの暮らしを通して、「子ども」の感性を新鮮に保ち続けるためには、そばにいる「大人」が必要だと訴えます。

この本と出会い、最初に印象に残ったのは「『知る』ことは、『感じる』ことの半分も重要ではない」という一節です。学生時代、保育と野外教育にのめり込んだ私にとって、表面的に何かを覚えることよりも、直接的な経験や感動、驚きを「感じる」ことから、「知りたい」と行動する過程（プロセス）の方がよっぽど重要だと気づくことに繋がりました。

その後、保育関係の仕事に就き、訳者の上遠さんが登壇される勉強会に参加した時のことです。上遠さんは、センス・オブ・ワンダーの意味を「どんなことに対しても、アンテナを張り巡らせて感じる、強くしなやかな感性」だとお話しされました。まさに「子ども」はセンス・オブ・ワンダーの塊だなと再認識しつつ、果たして今の自分「大人」はどうだろうか、と省みたことを覚えています。情報過多・知識偏重になり続ける今、アンテナを張り巡らせることは容易ではありませんが、感じようとする姿勢だけは持ち続けたいものです。

最後に、レイチェル・カーソンの言葉から、子どもにとって保育者はどのような存在かを考えようと思います。

「子どもたちがである事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら、さまざまな情緒やゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです。」

子どもが子どもらしくいることが難しい世の中において、知恵が生み出され、活かされる土壌・風土づくりが必要なのだと痛感します。子どもの傍らで寄り添いながら、感性豊かであり続けようとする「保育者（大人）」であってほしいと願っています。

# 特別企画

## 前田 雄二郎 新学長インタビュー

### 2023年9月に前田雄二郎副学長が 学長に就任されました

「学長の生のお声」を学生や教職員の皆さんにお届けするべく、特別企画として図書館職員がお話を伺いました



—9月に学長にご就任されたということで、今回図書館だよりの特別企画としてお話を掲載させていただこうと存じます。まずご経歴についてお伺いできますでしょうか。

慶応義塾大学の経済学部を卒業し、大学院ではもともと興味と親しみがあつた教育分野を研究したいと思い、アメリカのボストンカレッジに留学し、Higher Educational Administration（高等教育運営学科）で学びました。卒業後、帰国して富士通に入社しました。大学や教育機関へネットワーク機器や教務システムのサービスを提供している部署の営業として、関東を中心にいろいろな大学に行かせていただきました。本学で利用しているポータル等も富士通で提供しているサービス内容にあたります。

キャリアパスなどで経験がある方もいらっしゃると思いますが、働くうえでは動機が必要です。大学院で教育を専門に学んできた経歴もありますし、私には「教育はどのような時代でも残る」という考えがあります。それで、その分野に通じている富士通を選びました。富士通には4年半ほど勤め、その後、今の教学センターにあたる「学生センター」という部署で教務課長として勤務し始めました。

#### —図書館に関わるような思い出やエピソードはありますか？

利用者目線でのエピソードとなりますと、図書館に一番お世話になったなと思うのは小さい頃ですね。親に近所の図書館へ連れて行ってもらい、借りたい本を探しに行った経験でしょうか。大人になってからは買ってしまふことが大半なので、幼少期に経験した、興味のある本を自由に借りられる、読むことができる、という楽しい思い出が一番強く残っています。今は私の子どもが図書館へたまに行つて、本を借りたりしています。自分の子どもが好きな本を借りて喜んでいる姿を見るのも一つの楽しみです。

—学長ご自身が小さい頃に読まれた本で、印象に残っているものはおありでしょうか？

印象に残っているものは、「スマーフ」という小さな妖精のキャラクターの漫画です。確かベルギーの漫画で、日本語訳されています。スマーフたちが鳥をやっつけるとか、いろいろなエピソードがありました。  
(<https://onl.sc/G4G1VEe>)

—お好きな本や音楽のジャンル等、特に印象深いものがあればお教えてください。

まず本でいうと、歴史小説でしょうか。司馬遼太郎さんや海音寺潮五郎さんが好きでした。職業柄、本はたくさん読むようにしています。最近読んだ中で印象深いお薦めの本は、こちらの(学長が鞆から本を取り出し)『創造思考』という本です。(資料リンク：[https://honto.jp/netstore/pd-book\\_31070849.html](https://honto.jp/netstore/pd-book_31070849.html))この本の著者は、パークリー音楽大学学長や先生をされていた方で、「ミュージシャンだからこそイノベティブであり、創造的な考え方ができる、新しい価値を創ることができる」ということが書かれており、とても参考になりました。ぜひ、学生の皆さんにも読んでもらいたいと思います。

音楽は、CHAGE and ASKAや奥田民生、ゆらゆら帝国などのJPOPをよく聴いています。印象深い音楽というと、2011年3月に行われた本学の卒業式で聴いた、エルガー作曲「エニグマ変奏曲」より『ニムロッド』です。この年は、3月11日に東日本大震災が発生し、その一週間後の18日が卒業式となりました。例年、式典では「威風堂々」と「ハレルヤ」が先生方によるオーケストラと合唱で演奏されますが、震災の不幸があり、その年は「ニムロッド」が演奏されました。先生方も思いを込めて演奏してくださり、とても緊張感がありながら、厳かにかつ鎮魂歌のようでとても感動しました。本当にその年のその時でしか聴けない、スペシャルな音楽でした。もし違うタイミングでこの曲を聴いたとしても、あの時に聴いた演奏が一番素晴らしかったと感じると思います。

—大変な中での卒業式の実施だったのですね。

余震の危険があるようなタイミングなので、卒業式の式典を行わない大学がほとんどでした。本学でもどうするかという話になりましたが、理事長と学長が「卒業生をしっかりと送らなければいけない」と決められ、震災対策を考えながらも厳かな式を行いました。私はそのとき企画部でしたので、理事長や学長がどのように意思決定されたかは伝え聞くばかりですが、本当にすごい決断をされたと思っています。

—これまでのご経験で転機になったことはありますか？

一番挙げやすいのはコロナ禍ですね。コロナになって様々な価値観が変わり、やり方も変えなくてはならず常に「どうしよう？」と悩む期間でとても大変だったと思います。先生方も学生さんも職員の方も、皆それぞれ大変だったと思いますけれど、皆さんに協力していただきながら、新しい価値観で探り探りやっていくということでスタートし、最初はとてもきつかったですが、だんだん慣れていきました。またコロナの影響で電子化が進み、

ある意味一旦それまでのやり方をリセットでき、新しいやり方を開発していくトライアルのようなこともできました。したがってコロナ禍は大変辛かった思い出ですが、それがあって今変わることができたし、得られた経験もありますから、ひとつの大きな転機ですね。

—コロナ禍が過ぎてからも、現在進行形で世の中が変わっていますよね。  
生き方を考える転機になったような気がします。

そうですね。いろいろな人にとって壁になり、生き方を変えなければならない面もあったと思います。でも、それを後ろ向きに考えていても仕方ないですよね。無理やりにでも前に進まなければいけない、乗り越えていかなければいけないという感じで。振り返ってみたら、大きな財産になったなあという感じです。

—学長がお仕事をされる際に大切にされていることはどういった点でしょうか？

「現場をしっかりと把握すること」を大切に考えています。前職の富士通での勤務は、お客様に物を売ることが基本的なスタイルでしたが、お客様はなぜそれが必要で買ってくれたのか、それはどう役立っているのか、そしてシステムトラブルに対するご意見一つひとつについて、「どの人が」「どう言っているか」を把握することがとても大事なのです。それがわかれば課題を適切に発見できたり、解決策を提案できたりします。伝え聞いたことだけで策を立てても、実は効果的な提案ではなかったりもします。ですからやはり現場に行って事実を確かめる、ということがとても大切だと思いました。

そういった経験を前職で積んだあと、洗足で窓口業務にも携わり、学生さんや教員の方たちからの不満や要望の話を受けてきました。なぜそういった声が出るのかという理由を生々の現場で確認するほうが絶対強いのです。例えば、ある部署から「～といった声が寄せられました」と聞き、「分かりました、対応します」のやり取りだけだと、その対応が本当に有効かどうか分からないのです。だから実際にその現場に行き、自分の目で見て確認することで、別の解決策が見つかる場合もあります。また、更にもっと良い策を見つけて今までのやり方を変えることで、課題となっている部分をクリアする方法も見つかるかもしれません。ですから、きちんと現場で確認するのがとても大切だと思います。



— 私たちもカウンター業務を通して、学生さんや教職員の方からいろいろな要望が届きます。

私も学生センターや企画部などで、いろいろ経験させていただきました。本学で一番重点を置いている業務は、当然ながら学生さんや先生方の教育現場に関することです。そこで出てくる様々な課題を一番最初に聞くのは、窓口で話を聞く職員さんたちです。それが一番大変だと思うのです。当然対応できることとできないことがあります。一意見として受け取り、それを吸い上げて改善できるよう持っていく、という流れになりますが、窓口対応をされている職員が一番ヘビーだろうと思います。

現在私は学長という立場になり、なかなか現場に出向くことが難しくなりましたが、各部署の責任者の方たちや、現場の声をまとめられている職員の方たちを通して状況を聞き、それを元に職員の皆さんと一緒に解決策を考えるということが、今自分がやらなければいけないことであり、気を付けて取り組まなければならないと考えています。

— 学長が仰った現場の声を聞くことの大切さは、学内のどの仕事にも共通して言えることですし、忘れてはいけないと強く感じました。

自分も忘れず大事にしたいと思います。あともう一つ思うのは、何かやるときに悩むことも多々ありますが、一つの指針として常に「これをやることで学生さんのためになるのか」をイメージしながらやった方が、納得感があるということです。どちらを選択しても一見変わらないように思えたとしても、学生さんや教員目線で考え、「これをすることでどういったメリットがあるのか」「困ったことにならないか」を意識して仕事をしています。

— (職員一同深く頷きながら) ありがとうございます。とてもためになりました。



—最後に、学生さんや教職員に向けてエールまたはメッセージをお願いできますでしょうか。

エールというほど立派なことを言える自信はありませんが（笑）

まず学生さんたちには、せっかくこの大学を選んで入学してくださったのですから、学園内の環境をフル活用していただきたいです。図書館やたくさんの教室はもちろん、LawnテラスやMUSEでの学生ライブイベントも始めましたし、この学園には色々な経験をできるチャンスがあります。一步を踏み出すのはなかなか難しいとは思いますが、学生の間にはたくさんの経験をしていくということこそ、学生時代の一番のメリットだと思います。ぜひ臆することなく、失敗や成功も含めていろいろな経験を積んでいただきたいと願います。そして、それを教職員一同でしっかりサポートしていきたいと思っていますので、どんどんチャレンジしていただきたいです。

—お聞きしながら自分の学生時代を思い返しておりましたが、私が学生の時はLawnテラスもMUSEでのライブイベントもなかったもので、今の学生さんは演奏する場が整っている環境だなと常々思います。そして近年はコースも増え、コースの垣根を超えて企画された本番が多いように感じます。

私が入職した2009年はブラックホールができた年で、ポピュラー系のコースがブラックホールに集結しました。以前は、学生さんだけでなく先生方や事務体制の中でもジャンルごとの音楽性の違いがあったのと思いますが、この2009年をターニングポイントに、今では学生さんも様々なコースの方と関わり合い、キャンパスライフを通じて自然なかたちでいろいろな音楽に触れ、音楽の多様性を感じ取れているだろうと思います。そして、それがこの大学の良いところだとも思います。





そして教職員の皆さんには、学生さんを支えていただきたいですし、それを使命だと思っていただきたいです。きっとそういったことがやりたくて入職してくださったと思うので、学生さんがどう成長していくか見届けつつ手助けできるよう、教職員共に協力し合ってサポートしていただけたらと思います。また、世の中にはたくさんの職場とさまざまな音楽大学がある中で、ご縁があって今この洗足にいらっしゃると思うので、ぜひその誇りや自分の仕事に対する自負を持っていただき、この学園が更に良くなっていくにはどうしたら良いのか、ということを考えながら取り組んでいただけたら嬉しいです。

— 私たちも心に留めてこれからも頑張っまいります。

大学に入職する際、学生さんが充実した大学生活を送り、社会人として巣立っていくサポートをしたいと思っていましたので、今後もその気持ちで仕事に力を注いでいこうと思います。

働くなら、誰かの成長に役立てるとか人の役に立つ仕事をしたいですね。同じ仕事をやるにしても、結果はだいぶ違ってくると思うのです。

— 本当に！人の役に立てたら嬉しいと思います。

今までの図書館だよりは、各コースの先生方におすすめの本を紹介していただいておりますが、創立100周年が迫るこの機会に、図書館も新しい活動を展開していきたいと思い、この特別インタビューをさせていただきました。貴重なお話をお聞かせいただき、ありがとうございました。

2023.10.26



## 図書館からのお知らせ

### 図書館セミナー

毎年図書館主催でセミナーを行っています。

今年は、音楽学 西釋英里香先生による『楽曲解説 書き方講座』を10月18日と10月25日に開催しました。演奏会のプログラムに載せる楽曲解説の書き方を、図書館の資料を用いて実際に書き起こしながら学んでいただきました。

今後も学生の皆さんの様々な活動に役立つ内容のセミナーを企画していきます。

### 図書館SA(学生アシスタント)による季節特集

図書館入口特集コーナーでは様々な資料を紹介しています。

窓側スペースでは、図書館SAが季節ごとに一押し資料を選び、おすすめポイントを紹介しています。様々なコースからなる図書館SAならではのラインナップをぜひご覧ください。



発行：洗足学園音楽大学附属図書館  
洗足こども短期大学附属図書館  
発行日：2023年12月1日